

姜生著、三浦國雄・田訪監譯

『漢帝國の遺産―道教の勃興―』

一一ノ宮 聰

本書の原題は『漢帝國的遺産―漢鬼考^①』であるが、日本語譯では副題を「道教の勃興」としている。監譯者の三浦國雄氏は解題の冒頭で、「當初我々は「漢代人の死後世界」というタイトルに差し替えるつもりでいたが、著者の強い要望を入れてこのようなものに落ち着いた」と述べる。つまり原文の「漢鬼」から日本語譯で「道教」と變えることで、著者の主張をより明確に表したのである。そして著者が「道教」という言葉にこだわった理由は「中國の歴史上のいわゆる「道教」は、本質的に古い漢帝國が後世に残し傳えたその精神の化身なのである。こういう風に言うべきであろう、「道教」の魂は「漢鬼」の魂であり、「道教」の儀軌は漢墓の儀軌であり、「道教」の理想は漢帝國の理想なのだ、と」（六四五頁）とする。つまり道教こそが漢代の精神を考察する上で不可欠であるにも関わらず、これまで道教の視點から十分な考察が行われていない事が、本書を著す強い動機にもなったのである。さらに三浦氏は「歴史學、宗教學、圖像學、思想史學、考古學、文學などを自在に横斷し、畫像と文獻、巨視と微視から漢という時代に肉薄した希有な業績」であり、「著者以上の力量の持ち主でない」と全

體を見透した正確な解説などは至難のわざという氣もする」と述べるように、廣範な視点から漢代の宗教體系の分析を試みた力作である。そのため、筆者が本文を書くにあたり、自身の狭い見識では本書を正しく評することは難しいとわかつている。そこで各章の要點をまとめ紹介することで、書評に代えることを許していただければ幸いである。

・序説 漢帝國の信仰の構造

現在の漢代の研究では多くの歴史家が、竇太后の死後、そのまま天師道の勃興へと繋げている。それは武帝が「儒學を獨尊」したことや、資料の缺乏という多くの要因のためである。しかし、この空白の三百年間の漢代宗教史の軌跡や人々の心の變遷こそが重要であるものの、歴史的記録や學術的探究は多くない。そこで著者は、この點に重心を置き、本書を書き進めたと説明する。具體的には「漢墓」「漢鬼」「尸解」という三つの視點を用いる。漢墓は「漢代人が生命の永遠性を追求するために構

築された一種の宗教建築であり、古代の宗教者たちが死者を救済し、仙化するために設けた儀式の施設」であり、「物理的な構造と思想的な記號によって「煉形の宮」とされた特殊な空間」である。漢墓は、單に死者を葬る場所ではなく、人間が新しい生命を鑄造し、永遠を求める場所なのである。つまり生前は儒家道徳を實踐した人でさえも、死後は昇仙して不朽となることを許される場所であつた。そして死者である漢鬼が尸解を通じて昇仙するための重要や装置でもあつた。これらを検討するため墓主とともに墓内に埋葬される漢畫や裝飾品を主たる資料として用い、畫像と文獻の相互から漢代の宗教信仰や時代精神を検證していく。

上篇 「煉形の宮」——漢墓の時空と神々と仙人の系譜

・第一章 漢墓時空考

本章は、漢墓内に刻まれる畫像や紋様を読み解くことで、死者が漢墓という生命轉換装置を経て、いかに昇仙するのか、その際に漢墓が果たす機能（儀禮的、象徴的

女性質)について述べる。漢墓の機能は、多くが室内の文化的要素(墓内の畫像システムが最も重要)に依據しており、死後の信仰理論(尸解信仰)を理解するために必ず漢墓内の畫像や紋様を理解する必要がある。これを理解できねば、その背後に潜む眞の漢代思想世界を復元することはできない。

そこで「六博圖」に描かれる神仙が遊ぶ様子は、漢墓が生命轉換裝置であることを象徴しており、『山海經』の「穿胸國」「羽民國」「軒轅の國」などの國は仙界を描いているとする。これら畫像が示すように、葬送儀禮によつて墓室の中は神仙世界へと繋がる生命轉換の空間となり、葬られた人が昇仙するための裝置としての役割を果たしたのである。こうした死と仙の命を繋ぐ場所としての墓室は、金丹を煉成する丹爐のような形状をしている。さらに孝堂山石室を例に墓室に刻まれる紋様を検討し、『太平經』の大地に對する認識を用い、斜線紋は「土」、菱形紋は「石」、五銖錢は「泉」を示すとす。つまりこれら紋様は地下世界の冥界(九泉)を象徴して

いと述べ、漢墓の記號システムの全體的な意圖を把握していった。

・第二章 漢代神祇考

本章では、畫像石に刻まれる西王母、さらに共に描かれる鬼神たちとの組み合わせは、漢代の尸解信仰、およびこれによつて展開される死から昇仙するまでの儀式を表現しており、漢代精神世界の重要な構成要素であると述べる。

前漢以前の文獻では、西王母は一人で穴處しているイメージが描かれる。そして後漢中後期には木公(東王公)圖と對置されることは廣く知られている。そこで子路、老君、容成公、羅緬、鷄頭、牛頭といった神人たちと西王母が組み合わされる圖像を検討することで、神格の變遷に着目する。

東王公のほかに、一部地域では風伯が西王母に對置されることは知られている。だが、前漢後期には魯南地域で子路と對となる姿が見つかった。そして子路の頭の雄

鶏冠は次第に西王母の頭上へと姿を變えていったと指摘する。また、漢代に徐々に地位を高め崇高な神へととなった老子（老君）は、前漢には鳥面の姿で描かれていた可能性があると指摘する。こうして西王母と共に描かれる神々の變遷を検討することで、牛頭の人物は天下鬼神の主、鳥面は救済機能を具えた老君であると指摘し、漢代の尸解信仰、および死後昇仙の儀式を表現していると述べる。

・第三章 漢代仙譜考

戦國・秦・漢にわたって盛行した神仙思想は、相應する仙譜を形成し、世の人びとに仙人の存在を證明しようとしたと考えられている。漢代に見られた仙譜は、現在、一般的にいわれる『列仙傳』『神仙傳』『神靈位業圖』などの道教布教文獻ではなく、早期のものは『列仙傳』であった。しかし、『列仙傳』よりも早い仙譜が存在するのではないかと著者は考え、「漢代神仙思想の支配」下において形成された漢墓そのものが、とてつもなく大きな

一つの鬼神世界であった」と述べる。しかし、こうした考えが一般的に廣まっていけないのは、あらゆる文獻を探してもこれに關する記述が認められないためだとも述べる。そこで著者は、畫像石にこそ漢代列仙圖譜の形態が保存されており、漢代の鬼神世界を示している、と指摘する。この手がかりとして武梁祠東壁、西壁、後壁を中心に、そこに描かれる歴史人物圖や歴史故事圖などの検討を進める。異なる時代の歴史人物が一堂に集る不合理や世俗の經驗を超えた多くの奇景は、どれも「世俗の時空秩序を超越した特徴を示しており」、圖像の背後には宗教的な價值基準が隠されているという。

同時に、畫像石に描かれる仙鬼系譜は、漢代の宗教信仰構造が反映されているが、「漢・晋交代の際の價值觀の急變に伴って變化」しており、畫像石と道教文獻の相互の實證研究によって、漢代仙譜の基本的様相や當時の『春秋』の大義を核心とした成仙基準を明らかにできるのではないかと述べ、これら檢證は、初期道教の起源を研究することに對しても大きな意義を持つていと結ぶ。

下篇 「太陰煉形」——尸解成仙儀禮の展開

・第四章 「陰陽は死せず」——前漢「道者」の尸解仙術
本章では、まず漢代の信仰主體を探るうえで、漢墓から出土した簡帛文獻、畫像磚、畫像石や墓室の壁畫が貴重な資料を提供しているが、従來の研究では讀解方法上の問題のために、資料の價値に對する合理的認知を制約していると指摘する。そこで著者は、馬王堆出土の帛畫や套棺漆畫、さらに『十問』を分析することで漢代宗教信仰體系の成立について考察する。

馬王堆一號墓のT型帛畫について、ここに描かれる圖像は「引魂昇天」、または「引魂入墓」を表すなど様々な議論が見られる。これに對して著者は、帛畫右上に描かれる九つの太陽（九天信仰）や帛畫の下から上に向かつて表される昇仙の過程（墓主の死↓蓬萊で神藥を得る↓道書を授けられる↓玉漿を飲む↓崑崙↓九天に昇る↓仙人となる）、棺に描かれる漆畫、さらに馬王堆三號墓出土の竹簡『十問』を手がかりに意見を展開する。

ここに共通して表される事柄は、「死から仙への生命

の轉換は漢墓の最も崇高な宗旨であり、「尸解」はこの死後の生命轉換に對する信仰の核心であった」。また『十問』を讀み解くことで、この時期にはすでに昇仙思想が理論的に作られており、さらに「道者」と呼ばれる戰國以來の尸解信仰を創造的に繼承している集團が存在していた事を指摘する。そして漢墓は、死者の魂をあの世に留める場所ではなく、鬼から仙への生命轉換裝置であると述べる。

・第五章 神藥と天厨——漢墓の煉度科儀

墓内の各種器物や圖像の思想的シンボル、および布置には理論的意味があり、葬禮や死者の昇仙過程において何かしらの役割を果たす。つまり墓内の器物や圖像、さらに配置は冥界での手続きであり、儀禮であると考ええる。本章では、こうした墓内に布置される器物や圖像の違いから、墓葬儀式のありうる形態の把握を試みる。つまり漢墓内の各種器物、圖像の思想的シンボル、布置の理論を讀み取ること、漢人が本來持っていた思想形態を明

らかにしようと試みる。そこで主に濟南無影山漢墓から出土した彩陶明器を用い、『眞誥』の「太陰煉形」に関する記述と照らし確認していく。

出土した明器には、「仙丹を送り届ける神吏が護送する、二つの壺を背負った鳥」、「瑤池の玉漿を送り届ける、主を仙人が歌舞雑技で祝賀し、神吏が墓主の昇天を迎え入れている場面」、「墓主を乗せ昇天しようとする『太一帝君』のところから来た馬車」などがある。著者はこれら器物や陶俑について、理論的秩序が繋がった宗教的言説であり、漢代の尸解信仰や墓葬の儀式を明らかにしている、墓主の「太陰煉形」は三官によって守護されている、と述べる。そして神使、丹鼎、神鳥、宴飲歌劇のめでたい情景などは、いずれも墓主が神薬を得て成仙したことを繰り返し強調していると述べる。

また漢墓からは大量の庖厨圖も出土する。これは葬儀で賓客をもてなす場面や祖先の靈魂祭祀の場面を表すなど多くの意見がある。しかし著者は、畫像石は墓中の死

者のために作られた物であることから、庖厨圖も市井ではなく、神仙世界の「天厨」であり、死者の昇仙過程の一部を示すという。さらに漢墓から大量に出土する「天倉」「太倉」などの明器や文字、庖厨圖が表す死後世界の「天厨貽食」といったものは、施食煉度科儀の淵源探求の手がかりになるのではないかと指摘する。

・第六章 道書を奉じ王母に朝見する——漢畫「孔老相見圖」に見る登仙儀禮

本章は、「孔老相見圖」がいかにして墓葬畫像の重要な構成要素となるに至ったかを分析することで、漢代の宗教思想において、死者が轉變して仙人になる儀式の理論を考察する。

「孔老相見圖」は、その名の通り「孔子が老子に拜謁する」様子を描いた圖像であり、そのタイプは大きく三つに分けられる。一、孔子が多くの弟子を率い老子に拜謁し、老子の背後にも多くの随従する者がいる。二、孔子が老子に謁見するにあたり、二人の間に一人の童子が

描かれる。一般にこの童子は項橐とされる。三、孔子と老子の二人だけが向き合う。三タイプの圖像が示す所はいずれも、當時、老子は道教徒の間ではきわめて崇高な「太上老君」となっており、神格は西王母に次ぐものであった。そして漢唐の間の最も神聖な崇高化の手續きが「道を得て仙となる」ことであり、老子は「符籙を掌握する」大神「老君」であった。そこで、孔子や弟子達が老子に拜謁して「道を得て書を授けられる」ことで、みな仙人となることができたのである。つまり墓内に描かれるこの圖は、墓主も孔子のように老君に拜謁して、道を得て書を授けられたことを暗示していると著者は述べる。

「老子相見圖」は、しばしば西王母の畫像を伴っている。當時の神學體系では、西王母を頂點として、老子はそれに次ぐ神格であった。そのため二つの畫像が配置されることで、墓主は、先に老子に謁見し道書を授かり冥界の審判を免れ、次に西王母に朝見することで昇仙を果たしたことを意味するという。また、畫像石で多く見ら

れる「車馬出行圖」は、漢代では車馬が最も優れた交通手段であったため、死後も車馬に乗り崑崙の西王母のもとへ朝見に向かったと指摘する。

本書で著者は、従来の文獻主流であった研究に對して、様々な漢畫を使用して道教的視點から讀解することで、漢代の宗教思想體系の再構築を試みる。こうした畫像には漢人の精神のありようが生き生きと表現されている。さらに畫像に表現される「漢鬼」の遍歴、それを生み出した漢代の思想の總體こそが本書の題名にもある「遺産」なのである。この遺産を讀み解くにあたり用いられた新たな研究手法は、そのまま著者の研究意欲が現れたものとも言えるだろう。圖像の解釋をめぐるては質否があるだろうが、本書が示した新たな研究手法は畫像石研究に一石を投じ、今後の漢代思想史研究に裨益することが大きい一冊であると考ええる。

また、本書の研究の續きとして、「張道陵以前の儒生の道教」(『東方宗教』一二九號所收)が發表されているこ

とを附言しておく。

註

(1) 本書は中國で二〇一六年に科學出版社から國家哲學社會科學成果文庫として出版されている。中國語版については菅野惠美氏が書評を書かれておられ、『東方』四四〇號所載、二〇一七年)、日本語版は土屋昌明氏が『東方』(四七八號、二〇二一年)で紹介されている。筆者では本書の理解に及ばない部分が多々あったため、兩氏の文章を大いに参考させていただいた。

(A5版、七〇八頁、二〇二〇年一〇月、東方書店、
東方學術翻譯叢書、八八〇〇圓(税別)